



話 童

# 山のおみやげ

水 谷 年 惠

山の伯父様がお土産を持って、太郎さん達のうちへいらつしやいました。

「太郎も花子もお出で、いゝ物を持って来てあげたよ。」

伯父様がかうおつしやいますと、太郎さん花子さん大喜び、

「いゝ物つてなあに。」

伯父様のお出しになつたのは鈴蘭の花でした。

「御覧、根があるよ。鉢に植ゑてあげようね。」

伯父様は三株の鈴蘭を鉢に植ゑて下さいまし

た。青々とした葉の間から、白い花を附けた莖が元氣よく伸びてをりました。

可愛らしい鈴蘭の花から、それはくゝいゝ香がブーンと匂つて來ます。太郎さんは、

「僕、花なんかいらないや。」

と言つて向ふの方へ行つてしまひました。花子さんは、

「私、鈴蘭の花だあい好きよ。」

と言つて、嬉しさうに花を眺めて居りました。伯父様は、

「花子や、鈴蘭を可愛がつておやり。」

と言つて、山へお歸りになりました。

花子さんは鉢の鈴蘭を庭の日當りのよい所へ置きました。そして、毎日、毎日、お水を遣りました。

鈴のやうな鈴蘭の花、小さいお口で、「花子さん。」「花子さん。」と呼んで居るやうでした。

何日か経つて、よい香の鈴蘭の花がしほみしました。その色はもう真白ではなくなりました。花子さんはがっかりしてしまひました。けれども時々お水を遣りました。

或日花子さんは鈴蘭にお水を遣つてから、色の變つた鈴蘭の花をよく見ました。そしてびつくりして、大きな聲で叫びました。

「お母様、鈴蘭の實がなつてよ。鈴蘭の花が實を包んでよ。」

「何です。鈴蘭に實がなつたんですつて。」

と言つて見にいらつしやつたお母様も、

「あや、ほんとに。まあ、丸い／＼實がなつたねえ。」

と驚いていらつしやいます。お兄様の太郎さんも飛んで来て、

「やあ、珍しいね、鈴蘭に實がなつてる。」と面白がつていらつしやいます。

しほんだと思つた鈴蘭の花が、何時の間にか緑色のまあるい實を花一ぱいにしつかりと抱いて居ます。花子さんは山の伯父様に、お手紙を出しました。

伯父様、鈴蘭に實がなりました。緑色の可愛らしい實です。たつた一つです。

伯父様から御返事が來ました。

鈴蘭の實がなつてお目出度う。今にいゝ事があるよ。」

と書いてありました。

鈴蘭の實が段々赤くなつて、しまひに眞紅になりました。どんな美しい玉にも敗けない様な美しい鈴蘭の實は、お庭の中でたつた一つ眞赤に光つて居りました。花子さんは喜んで、山の伯父様へお知らせしました。

伯父様、鈴蘭の實が赤くなりました。赤い〜

鈴蘭の實を見て下さい。

伯父様はいらつしやいませでした。伯父様の代りに可愛らしいお人形が山から來ました。

花子さん、私の代りにお人形が鈴蘭の赤い實を拜見に出掛けました。此のお人形はあなたの妹にしてやつて下さい。

とお手紙に書いてりました。

花子さんとお人形は、毎日、毎日、赤い鈴蘭の實を眺めて、

鈴蘭の實はあかいね、

鈴蘭の實はあかいね、

わたし鈴蘭だいすきよ。

お花はきれい。

實はあかい、

鈴蘭の實はあかいね、

鈴蘭の實はあかいね。

と言つて褒めました。

附記 榛名山から採つて來た鈴蘭に實がなりました。たつた一粒の其の實が眞紅になつて、ながい間私を樂ませて呉れました。私は其の鈴蘭の實に驚異の眼を見張り、歡喜の情を寄せました。此の童話はさう言ふ事實から生れたものです。

\*

\*

\*

\*

\*

\*